

# マルメ大学研修報告書

看護学専攻 2年 原田真帆

初日は私たちの研修をコーディネートしてくださったアナ先生の講義から始まった。マルメ大学の紹介やスウェーデンの社会福祉、ヘルスケアシステム、チーム医療に関する講義を受けた。

マルメはスウェーデン南部にある第3の都市である。デンマークと隣接しておりかわりが深いので、マルメの人たちは自分たちのことをハーフデンマークと呼ぶこともある。数十年前、マルメは教育レベルが低く雇用が安定しない工業都市だった。それを改善するために1998年に生物医療科学・健康福祉・ケア科学・社会福祉学・犯罪学の5つの学部からなるマルメ大学が設立された。マルメ大学は地域に密着した大学として、雇用を生み出し、教育レベルを向上させることに大きく貢献した。スウェーデンの大学生は様々な年齢・国籍・バックグラウンドを持つ人々から構成されている。バックパッカーとして世界中を旅したり、医療とは全く違う職業についたりしていた人々が自分の人生の新たなステージとして医療職を選ぶことも珍しくない。税金が高く社会保障が充実していることで有名なスウェーデンでは、大学に通うための学費は全く必要ない。そのため経済的な負担が少なく、新たな技能を身に着けたい若者が大学に通いやすい仕組みができているのだ。そのほかにも医療費補助も充実しており、国民が負担する医療費は最大でも年間2万円ほどである。すべての人に高いレベルの医療が提供されているのだ。

2日目は作業療法士の資格を持つ方が経営している自助具の専門店に伺った。日本では見たことがないような道具も数多く販売されており、調理に関するものが多く店頭に並んでいた。このような道具がもっと普及すれば障害者が自立して生活を送るための環境が整えやすくなると感じた。作業療法士としての臨床経験がある方が選んでいる道具なのでどれも実用性が高く比較的値段も手ごろだった。スウェーデンでもこのように作業療法士や理学療法士の方が経営する自助具の専門店は少ないようだ。プロのアドバイスを受けながら道具を選ぶことができるような店が日本にも増えれば、障害者のQOLの向上に大きく貢献すると思った。

また2日目の午後はマルメにあるリハビリテーションセンターを訪問した。そこで作業療法士、理学療法士の方からお話を伺った。そのリハビリテーションセンターには近隣の人も利用でできるジムが完備されており患者もそこでリハビリを行うようだ。また理学療法士が産後のケアも行っているなど日本とスウェーデンでは理学療法士、作業療法士の担う役割について異なる点もあるということがよくわかった。そして私自身が作業療法士と理学療法士の役割分担についても理解が不十分であると感じる点もあったので、まずは自分の国の作業療法士・理学療法士の役割やそれに関する制度について勉強が必要だと思った。また日本でこのように作業療法士、理学療法士の方からお話を伺ったことがあまりないので、日本でもこのような機会があれば活用していと思った。今回の研修に参加したことでこのように帰国後も自分が学ばなければならないことをたくさん見つけることができるようになった。

3日目は KUA の説明を受けた。KUA では医師、看護師、作業療法士、理学療法士になるため勉強している学生たちが 8 人のチームを作り、2 週間の臨床実習を行う。各グループにはファシリテーターという指導者がおり、彼らが生徒たちが患者の行う治療に関する責任を担っている。ファシリテーターは基本的に学生に治療方針や診断について指図することはない。生徒たちの自主性を重んじており、困っているときには助言を与えるなどして学生が自分たちで問題を解決していけるように支えていくのが彼らの役割である。学生たちはグループで受け持った患者に対して情報を共有し、協力して治療を行う。2 週間の実習が終わると、チームファイナルと呼ばれるまとめを行い自分たちの活動の振り返りを行う。学生の間から実際の臨床現場と同じように各専門職が共同で実習を行うことで、専門職間のコミュニケーションが円滑に行われるようになり、結果的に患者により良い医療を提供することができるようになる。またほかの医療職についての理解を深めることもできる。KUA では人形を使ったシミュレーションも行っている。実際に声を発したり、血圧を測ったりできる人間の症状に近いものを再現できる人形を用いて行う。患者が急変した場合を想定して学生たちで治療を行っていく。その間指導者が見守っており、のちにリフレクションを行って実習を振り返る。私たちが見学に行った際は若い病院の職員が研修として実習を行っていた。日本ではこのように違う専攻の学生同士が共同で実習やトレーニングを行う機会はあまりない。しかしチーム医療で活躍できる人材を育成するにはこのような他職種との共同での実習は大変有効であり、取り入れるべきだと強く感じた。

4日目はスウェーデンの福祉国家としての歩みや高齢者ケア、ヘルスケアシステムについての講義を受けた。

スウェーデンでは日本よりも早く高齢化が進んでおり、高齢者のケアについても様々な変化を経てしっかりとしたケアシステムが確立されている。そのため日本が今までに参考にしてきた点、これからすべき点がスウェーデンには多く存在している。一方では大きく異なる点もある。スウェーデンでは人口に対する移民の割合が大変多い多文化社会なのだ。例としてマルメでは人口の 40 パーセントが移民または移民を祖先に持つ人々である。そのため医療現場では様々な文化背景を持った異なる民族への対応が求められる。英語やスウェーデン語が話せない人、宗教上の理由で献血ができない人、同じく宗教上の理由で食事に制限がある人など様々である。そのためスウェーデンの医療職者には多種多様な文化や習慣を理解し、文化の垣根を越えてすべての人の習慣や信条を尊重した医療を行う能力が求められる。学生のうちから異文化に触れ、多文化社会に適応することが大切なのだ。日本でも今後グローバル化の波が押し寄せ、異なる文化を持つ人たちに医療行為を行う機会が増えるであろう。異文化理解については私たちはスウェーデンの医療現場から学ばなければならないことが多くあると感じた。

高齢化大国であるスウェーデンでは人口の 18 パーセントが 65 歳以上で、5.3 パーセントが 80 歳以上の人々から構成されている。また日本と同じく核家族化が進んでおり、高齢の家族と同居する人は少ない。高齢者のケアは自治体に納められる税金と政府からの補助によ

り賄われている。また高齢者の個別性を重視したケアがなされており、QOLの改善に役立っている。

5日目にはクリニカルスーパービジョンに関する講義を受け実際に体験した。クリニカルスーパービジョンとは医療職者が感じる苦しみを軽減することで患者により良い医療を提供することを目的としたものである。数人の学生と指導者で構成され、それぞれが実習などで体験した苦しみや悲しみ、疑問などを共有し、振り返りを行うことで解決策を見つたり自分とは違った視点での意見を聞いたりすることができる。指導者は話の流れを作るのみで基本的には生徒同士で話し合いを進めていく。患者が苦しむ様子を見てみると、医療従事者も苦しくなることがある。その苦しみから逃げて患者との距離を置いてしまうと患者に良い医療を提供することができなくなってしまう。そこで、クリニカルスーパービジョンを行い、苦しみを軽減することで患者により良い医療を提供できるようになるのだ。たとえ解決策がなくともただ話を聞いてもらうだけでも苦しみを軽減することはできる。授業では実際に私が実習で感じた苦しみを事例として挙げて数人で話し合いを行った。先生が進行役となり話し合いはとても円滑に進み、私は心が軽くなるのを感じることができた。

そして一番最後の授業でアナ先生と一緒に5日間の研修の振り返りを行った。よかったと思うこと、改善してほしいと思うことをそれぞれが挙げていった。改善してほしいことの中で多かったのが、マルメ大学の学生と交流を持ちたいという意見であった。今回研修に参加して私自身も日本以外の国の同世代の若者と交流を持ってみたいと思うようになった。今回の研修をきっかけに人とのつながりの輪を、海外にも広げていきたいと思った。

研修に参加するにあたって、スウェーデンと日本それぞれの医療制度について学んでいた。しかし先生や先輩方に比べまだまだ知識も経験も不十分で、先生や先輩の解説なしには理解できないことがたくさんあった。これからの学校生活でしっかりと医療制度に関する知識を身に付けていきたい。また、違う専攻の専門分野についてはお互いに教えあって互いの専門性について理解を深めることができた。日本はスウェーデンよりも異なる専攻同士が共同で学ぶ機会がない。自分から積極的にほかの医療職についても学んでいかなければならないと感じた。チーム医療の中でそれぞれが最大限持っている能力を生かせるように自分には何ができて何ができないのか、相手には何ができて何ができないのかしっかり理解して互いの能力を生かしながら協力することが大切だ。

研修に参加する前、私は自分の英語力に自信がなく「ちゃんと授業を理解できるのか。英語で上手くコミュニケーションが取れるのか。」と不安に感じていた。しかし先生方はゆっくりとしたわかりやすい英語で授業をしてくださったので少しわかりにくいところがあってもある程度理解することができた。また、毎日英語を耳にしているとだんだんと聞き取れる言葉が増えていくのが感じ取れた。そしてそれと同時に自分自身も英語の発音が向上し、自分の意思を明確に伝えられるようになっていくのがわかった。今回の研修では様々

な立場の様々な国籍を持つ人々と接する機会が多くあった。私がつたない英語で話しかけると、相手は決まって私の目を見て一生懸命私が伝えたいことを理解しようとしてくれた。それぞれに異なる言語を使用し、異なる文化圏に暮らす人同士が友好関係を築くためには英語が欠かせない。国際交流の場においてももちろん上手に英語が話せるに越したことはないが、たとえうまく話せないとしても相手に思いを伝えたいという気持ちが大切なのだ。研修の最後にアナ先生がかけてくださった言葉で私は自分英語力やコミュニケーション能力に自信を持つことができた。先生は、「私たちの共通言語は英語しかない。だから私たちがコミュニケーションをとるには英語が必要。この1週間私たちはしっかりとコミュニケーションをとることができた。それにわたしはあなたたち一人一人が言いたいことがちゃんとわかる。あなたたちは英語がしゃべれるのよ。自信を持って。」とおっしゃってくださった。それがとても嬉しくてこれからもっと英語力やコミュニケーション能力を高めていきたいと思った。世界中の様々な人とのかかわりを通していろんなことを吸収して自分の人間性を高めていきたい。そして将来豊かな人間性を持った、患者の心に寄り添える看護師になりたいと思う。今回の研修に参加しなければ、気づけなかったこと、出会えなかった人出合いがたくさんある。一緒に研修に参加した保健学科の皆さんにももしかしたら仲良くなることはなかったかもしれない。それらのひとつひとつの発見や出会いの機会を与えていただけたことに心から感謝し、今回の研修での経験をこれからの学校生活に生かしていく。